

<中高生部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
春が来る	<ul style="list-style-type: none"> ○主人公や周囲の人間の価値観が、様々な出来事や対話を通して前向きに変わっていくところ、分かり合えていくところが読んでいて明るい気分になれる。タイトルの「春が来る」が、ラストの主人公の言葉でも使われ、新しいスタートを彷彿とさせる「春」という言葉のイメージにも良くあっている。 ○起承転結が上手く構成されていて、ストーリー展開が面白い。 ○キャラが立っている。それぞれが個性的で、言葉遣いなども性格に合わせて書き分けられているため、キャラクターの魅力が分かりやすく伝わって来る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○不倫、家庭崩壊、育児放棄等々の現実是非常に重く、複雑である。こうした問題を、少し軽く扱っている感があるのが否めない。 ○物語自体は「俺」による語りにおいて進行するが、ところどころ、説明における神視点と「俺」視点とのバランスを崩すところがある。 ○歴史上のモチーフと作品中の人物の行動がリンクしていない。わざわざ登場人物の名前を歴史上の人物にする必要性を感じなかった。
春さん	<ul style="list-style-type: none"> ○短い作品ながら、1つの物語、場面、思いが簡潔に描かれていて、完成度が高い。 ○登場人物ごとに口調を変えたり、比喩表現や情景描写などが細かく丁寧に施されており、良いと思った。 ○登場人物たちの流ちょうな京都弁が、読んでいて京都らしさを感じさせる。 ○「ぼく」と「おばあちゃん」の静かで温かな親交がうかがえる良い作品だった。素直な文章、シンプルな内容なので、じっくりと読めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○登場人物の職業が「伝統工芸士」とあるが、仕事の内容がほとんど紹介されないため、その職業設定とした理由が分からなかった。その仕事内容等をふんだんに作品に盛り込めば、この作品と京都との関連性がより強固になるはずだったのに、その肝心なところが抜け落ちてしまっている気がする。 ○各々のキャラが鮮明に立っていないのが惜しい。人物描写にしる、情景描写にしる、全体を通じて説明不足の感がある。各々の人物像をもっと緻密に肉付けし、各々のエピソードを増やせば、作品のボリュームも増して、作品全体に奥行きが出ただろう。
おばあちゃんの小箱	<ul style="list-style-type: none"> ○なかなか開かない不思議な箱とその中身に関する展開が、作品にちょっとしたミステリー性を与え、読者を結末まで引っ張っていく構成がおもしろい。 ○主人公が自分なりに考えて行動し、それを通して成長していくストーリーと、今後の成長を感じさせるラストが良い。最後まで書き切らずぼかして、読者にその後の展開を予想させる点も工夫が感じられる。 ○祖母との約束を果たそうとする主人公の試行錯誤や葛藤が丁寧に描かれており、読者は主人公に感情移入することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○物語の最重要ポイントである小箱の詳細が分かりにくかった。また、箱の中にあつた手紙は、何が言いたかったのかが分からない。ここがこの物語の中で一番大事なところなので、まわりくどい表現はやめて、素直な言葉で書いても良かったのではないだろうか。 ○良い題材を選んでいるのに、人物描写や情景描写等がどれもこれも少し足りていなくて、その結果、舌足らずというか作品の完成度が低くなってしまったことが誠に残念である。
人形の夢と目覚め	<ul style="list-style-type: none"> ○主人公の心の動きなども折々にきちんと表現されていて、どのように気持ちが変わっていくか、順を追って読んでいくことができた。 ○王朝ものだが、しっかりと背景が描けていたので感心した。優美な雰囲気もきちんと盛り込まれて表現されていた。 ○仕草の描写が丁寧。手などの動きから、登場人物の細やかな心の動きが読み取れる。 ○当時の風俗など、よく調べている。衣裳の色味や、慎ましやかな田舎と対照的に華やかな貴族の暮らしぶりなど、具体的かつ詳細で、ドラマを見ているような気分になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「入れ替わり」という設定は既視感がある。これまで多くの作品で使われてきている手法なので、この設定を使うのであれば、これまでとは全く違う世界を見せてほしいと思ってしまう。 ○主語が分かりにくいところがある。例えば、文中の「彼女」が、主人公のことなのか、女房のことなのか分からないなど。意識して書けると読みやすくなる。 ○このテーマで書くのなら、もっと長い話で読みたい。短すぎて勿体なく感じた。
三年前と現在(いま)の誰も知らない真実	<ul style="list-style-type: none"> ○一つの短編小説としてうまく完結しており、かつテンポが良いため食い入るように読んでしまった。 ○今を生きる中高生を取り巻く不自由でいびつな環境、それがために彼らが抱える苦痛や絶望が、叫びとなって生き生きと伝わってくる。しかし、苦痛や絶望で終始するのではなく、結末で一つの希望が見えるように構成したのは良かった。 ○主人公の内省的な部分がよく出ていて、成績に神経質になるところや、揺らぎやすい中学生の心の変遷が細やかに描かれている。 ○全体を通して、柔らかな(時に毒のある)京都弁が印象的。いじめや自殺など、中学生にとってシリアスな内容だが、流れるような京都弁が物語全体を柔らかなものにする良い役割を果たしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ストーリー展開が平坦。自殺という重いテーマを抱えているし、タイトルが示すとおりこの作品は前半が暗い過去の振り返りであり、後半もじつじつとした重苦しい展開なので、躍動感に欠けるモノクロ映画を見せつけられているようである。 ○勉強ができる人に嫉妬して死を選ぶ人がいるというのは、飛躍がありすぎではないだろうか。 ○「京都では、物事はオブラートに包んで言うことが好まれる」等、作者にとっては率直な意見かもしれないが、断定的過ぎて、読者を不愉快にさせたり、違和感を持たせる可能性があると思う。もっと他に表現の仕方があるので推敲が必要だろう。
今の僕は幸せです。昔の僕へ。	<ul style="list-style-type: none"> ○読者を作品世界に引き込む軽快な描写の効果で、一気にラストまで読み進めることが出来た。 ○主人公の価値観が、京都での人との出会い、交流によって変化していくところが爽やか。その中で、自分が信頼できる「本物の仲間」を見つけていることができるのも作品の魅力になっている。 ○宵々山の場面で、山鉦の迫力や祭りそのものの賑やかさがよく伝わってくる書き方がされている。京都の風物詩が具体的に描かれていて、場面が鮮やかにイメージできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○なぜ京都に逃げてきたのか、京都を舞台にしようとしたのかが見えなかった。 ○全体のストーリー性として大きな展開があっても良かったように思う。 ○素直にまじめに書き上げた熱意は十分に伝わってくるのだが、もっともっと作品の構成力、文章力を磨いてほしい。 ○名前の読み方が複数あるものについてはふりがなをふると読者が場面を想像しやすく読みやすいのではないかと思った。

<海外部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
声に出した沈黙	<ul style="list-style-type: none"> ○筆者の語彙力や、表現力が表れている。 ○内面的な表現が豊か。心の動きが、詩的な表現でなされていて、叙情的な世界観が魅力的。 ○京都を題材にするからこそ書ける作品であり、それだけの価値が京都という場所にあるのだと感じられた。 ○作者の祈りと愛に満ちた長い詩を読んでいるようだった。全体的に表現が美しいと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○心情変化のきっかけが分かりにくい。言葉にとってもこだわって書かれていることが分かるものの、物語全体の因果関係が分かりにくくなっている。 ○物語というよりは詩のようである。残念ながら、作者が何を言いたいのかが明確ではなかった。 ○話が抽象的で分かりづらい。

※ 二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋